

『ハイパーリオンの没落』への道程

——キーツにおける詩人の成長と現実への覚醒——

吉 賀 憲 夫

Keats' Idea of the Development of a Poet

Mainly through his Discovery of the Idea of
“Disinterestedness of Mind”

Norio YOSHIGA

As his early sonnets tell us, Keats' career as a poet begins with an escapist from the actual world to the sensuous world of beauty. But his intellectual mind gradually begins to look for the nobler life in the real world. He is deeply impressed by the fact that there is “an eternal fierce destruction” such as “every maw / The greater on the less feeds evemore,” even in the beautiful natural world where he used to escape to. He recognizes the actual and real world is full of miseries and finds the importance of “the complete disinterestedness of Mind” that eases the misery of the world. The new idea of his is the main theme of his second *Hyperion*. Though he could not finish the poem, we can find there his new attitude toward the real world. Keats' development as a poet is so clearly in his *Fall of Hyperion* that we can say his second *Hyperion* is, in a sense, his brief summary of his own life as a poet.

I

人間が成長してゆく過程とは、ある観点から見れば、幼い無垢の心の喪失の過程とも言えるであろう。現実世界の苦悩と悲惨を未だ知らない魂は地上に楽園を見るのである。しかし人間は成長するとともに、言い換れば、その死すべき運命を日々歩むにしたがい、ロマン派詩人ワーズワスが、彼のいわゆる *Immortality Ode*¹⁾ で嘆いた幼年期の至福の喪失を体験する。しかしこれは恐らくすべての人間が、その成長してゆく過程において、程度の差こそあれ、必ず経験する共通の想いであろう。とは言うものの、やはりこの主題はロマン派詩人にこそ似つかわしいと言わざるを得ないだろう。詩人の置かれている現実と、その詩人が失ってしまった何か素晴らしいものとの間の葛藤および失意は、まさにロマン派詩人たちが繰り返し唱い上げて来たものにほかならない。その点においてキーツも決してその例外ではなかった。彼のオードを中心とする叙情詩はその典型といえる。だが彼が他のロマン派詩人たちと異なる点は、彼の詩には致命的な失望や絶望は見られないということであろう。キーツは幸か不幸か、ワーズワスのように幼年期の至福を失った自己を嘆くほど長く生きることはなかった。また彼の

Endymion はシェリーの *Alastor* における徹底的な失望とは逆に、読者をあわてさすほどのハッピー・エンドとなっている。また *Ode to a Nightingale* における “Adieu ! The fancy cannot cheat so well / As she is famed to do, deceiving elf.”²⁾ においても、詩人は人間を欺き通し得ない “fancy” に対して決して深い絶望の念を感じているわけでもない。キーツにとって至福の状態とは、やがては過ぎ去るものであることは自明の理であったのである。

キーツは人間が幼年期に経験する官能美の世界の魅力を十二分に熟知していた。しかしキーツという詩人の特長は、これら官能美の世界を詩人が成長してゆく過程において必ず放棄し、別れを告げなくてはならない一段階とみなし、詩人は真理をもっと過酷な現実社会の中に見い出さねばならない、という人生観および詩人観を比較的若い時点において既に一つの理念として認識し、また信奉していたという点にあると言えるのである。彼は詩人として歩み出した極初期にあたる1816年の末の作品 *Sleep and Poetry* において詩人が最初に経験する官能美の世界を “the realm . . . / Of Flora and old Pan”³⁾ と呼び、美しく描写している。そしてそれを受け、次のよ

うに続けるのである。

And can I ever bid these joys farewell ?
Yes, I must pass them for a nobler life,
Where I may find the agonies, the strife
Of human hearts . . .⁴⁾

キーツは官能美の喜びを代償としても手に入れなくてはならないという“nobler life”というものが具体的にどの様なものかは述べていない。だがそれが人間の心の苦悩と葛藤という言葉に暗示されているように、人間の精神的成長を志向する人生であることだけは確かであろう。彼の感性は「フローラと年老いたパンの世界」という官能の世界にありながらも、彼の知性は既にその向こうにある別の世界を模索し始めていたのであった。

官能美の世界を人間の成長の一段階とみなし、人生の神秘を解明し真理に至らうとするキーツの姿勢は彼の思想として定着し、1818年5月3日付の手紙において再度表明されるのである。彼は人生を“a large Mansion of Many Apartments”，つまり「多くの部屋を持った大邸宅」に喩え、次の様に述べている。

I compare human life to a large Mansion of Many Apartments, two of which I can only describe, the doors of the rest being as yet shut upon me—The first we step into we call the infant or thoughtless Chamber, in which we remain as long as we do not think . . . we no sooner get into the second Chamber, which I shall call the Chamber of Maiden-Thought, than we become intoxicated with the light and the atmosphere, we see nothing but pleasant wonders, and think of delaying there for ever in delight . . . This Chamber of Maiden Thought becomes gradually darken'd and at the same time on all sides of it many doors are set open—but all dark—all leading to dark passages—We see not the balance of good and evil. We are in a Mist—We are now in that state—We feel the “burden of the Mystery.”⁵⁾

ここで述べられていることは *Sleep and Poetry* においてキーツが予見した人生そのものであり、当時の彼より正確な位置付けがなされている。現実というものは否応なく迫り来るのであり、キーツの現実に対する意識もますます明確なものとなっている。またこの現実への志向は、彼の詩人としての活動における最後の局面での

The Fall of Hyperion に至るまで着実にその強度を増し続けていくのである。

II

キーツの初期の詩においては、官能美の世界と現実というものは対立状態にあり、現実からの逃避の場として自然という「官能美の世界」が設定されていた、ということであろう。例えばキーツの初期にあたる1815年の10月から11月頃の作品であろうソネットの一節

O Solitude, if I must with thee dwell,
Let it not be among the jumbled heap
Of murky buildings. Climb with me the steep—
Nature's observatory—whence the dell,
Its flowery slopes, its river's crystal swell,
May seem a span; let me thy vigils keep
'Mongst boughs pavilioned, where the deer's swift
leap
Startles the wild bee from the foxglove bell⁶⁾.

は詩人の置かれている現実“the jumbled heap / Of murky buildings”から“Nature's observatory”という虚構への逃避を示す良い例であろう。都会から自然の美の世界への脱出という主題はミルトンや、キーツと同じロマン派の詩人コールリッジの影響を受けてのことであろうか、キーツの初期の詩には良く見られるのである。もう一つ例を挙げれば、

To one who has been long in city pent,
'Tis very sweet to look into the fair
And open face of heaven, to breathe a prayer
Full in the smile of the blue firmament.
Who is more happy, when, with heart's content,
Fatigued he sinks into some pleasant lair
Of wavy grass and reads a debonair
And gentle tale of love and languishment ?⁷⁾

と始まる1816年6月作のソネットもそうである。当然のことながら、これらのソネットには詩人の置かれている現実に対する対応は何ら語られていない。詩人はひたすら現実を逃れ、虚構の快楽の中に遊ぶのである。また当然のことながら、そこには以後のキーツのオード等に見られるそのような虚構の世界の破綻に伴う詩人の悲哀および失意も語られることはない。そこにおいては現実から逃避することのみに重大な意味があったといえよう。それゆえにキーツが *Sleep and Poetry* において官能

美の世界に別れを告げ得るか、という自問に対し、“Yes, I must pass them for a nobler life, / Where I may find the agonies, the strife / Of human hearts.”と答えたことはキーツの精神史の上で大変重要な意味を持つといえるであろう。

その後のキーツの詩および思索において、彼はそれまで単なる美の象徴であった自然の中にもう一つの自然、言い換れば過酷な現実という自然を見い出すのであった。1818年3月の友人レーノルズに宛てた書簡詩に次のような自然を描いている。

'Twas a quiet eve ;
The rocks were silent ; the wide sea did weave
An untumultuous fringe of silver foam
Along the flat brown sand. I was at home,
And should have been most happy, but I saw
Too far into the sea—where every maw
The greater on the less feeds evermore . . .
But I saw too distinct into the core
Of an eternal fierce destruction,
And so from happiness I far was gone.
Still am I sick of it ; and though today
I've gathered young spring-leaves, and flowers gay
Of periwinkle and wild strawberry,
Still do I that most fierce destruction see :
The shark at savage prey, the hawk at pounce,
The gentle robin, like a pard or ounce,
Ravenging a worn⁹⁾

ここに描かれているものは自然の残酷さ、弱肉強食の自然界に対する典型的なロマン派の反応であり、またキーツのナイーブな感性を示している。彼のこの様な自然のとらえ方は、彼が現実からの逃避の場と考えていた美しい自然の世界においても、人間の世の中と同様の悲惨と苦悩が存在することを彼に認識させたのであった。今やキーツにとって現実とは、また人の世とは残酷な悲惨な状態であることは自明のこととなった。

レーノルズ宛ての書簡詩を書いた一年後のキーツというものは、もはや世の悲惨に対し書簡詩で示したような大きな驚きと悲しみは表わさない。1819年3月19日付けの弟ジョージ夫妻宛ての手紙の中で、彼は友人ハズラムの父親の死期の近い知らせを受けた時の彼の感想を次の様に述べている。

This is the world—thus we cannot expect to give way many hours to pleasure—Circumstances are

like Clouds continually gathering and bursting—
While we are laughing the seed of some trouble is
put into the wide arable land of events—while we
are laughing it sprouts is <for it> grows and
suddenly bears a poison fruit which we must pluck
—Even so we have leisure to reason on the
misfortunes of our friends ; our own touch us too
nearly for words. Very few men have ever arrived
at a complete disinterestedness of Mind : very few
have been influenced by a pure desire of the benefit
of others . . . From the manner in which I feel
Haslam's misfortune I perceive how far I am from
any humble standard of disinterestedness—Yet
this feeling ought to be carried to its highest pitch,
as there is no fear of its ever injuring society—
which it would do I fear pushed to an extremity—
For in wild nature the Hawk would loose his
Breakfast of Robins and the Robins his of Worms.
The Lion must starve as well as the swallow . . .⁹⁾

ここには世の悲惨に対するいらだちはない。彼は冷静であり、感情の変化をほとんど表わしはしない。3カ月前に弟トムを失った経験等がキーツをそうさせたのであろうか。しかしキーツのこの「分別ある態度」は果して成長と呼べるものであろうか。それは単にキーツが世間というものを少し知るようになっただけのことかもしれない。“This is the world . . .”という言葉は、いわゆる大人の分別臭さだけを感じさせるのであって、「フローラとパンの世界」を棄て、「人の心の苦悩と葛藤のまつより気高い人生」を目指した詩人の悟りとは到底言えるものではない。しかし彼の真の成長とは、その様な自己の態度と心を分析し、批判する精神を持つに至ったことといえる。キーツはハズラムの不幸に対し、“This is world,”と他人事としてすませる自分というものが、彼の考える理想の人間の基準からどんなに掛け離れた存在であるかと考えるのである。彼の考える理想の人間とは自己と他人とを区別しない完全な無私の精神 (complete disinterestedness of Mind) を有する者たちなのであった、彼によればこの精神を持ち得た者は歴史上に、イエス・キリストとソクラテスの2人だけであるという。キーツにとって現実世界というものが苦悩と失意と悲しみに満ち溢れていることは自明のことであり、大自然の中の弱肉強食による“eternal distruction”も現実なのであった。しかしこれらの事実を知ることは、決して「成長」と呼ぶほど大それたものではなく、誰もが人生を歩むに従い必ず認識してゆく事柄に外ならないのである。この

手紙で重要なことはキーツがこの様な現実を認め、その現実の中で他者の苦悩を自己の苦しみと感ずる精神の在り方を求めたところにあると言えよう。そしてこの主題は *The Fall of Hyperion* (以下『没落』と表わす) へと受け継がれるのである。

III

現実というものが悲しみに溢れたものであるとの認識に立つ時、その時初めてそのような現実の前に詩人としていかにあるべきかということがキーツには切実な問題となったのであった。無私な精神こそ、この人間社会に必要なことであり、キーツもキリストやソクラテスの様に、何かこの世に善を成したいと思ったのであろう、彼の意識は急激に社会へと向けられてゆくのである。しかしこのキーツの社会への関心は、彼を一つのディレンマへと陥し入れた。それは悲惨な社会に対し詩を作るという文学的行為でしか対応できないことへのキーツの当惑と苛立ちとも言うことが出来よう。彼は社会にとって文学とは何なのかという古く、また常に新しい文学の有効性の問題へと逢着したのであった。『没落』はまさにこの様な観点から「詩人とは何か」という問いを自からに問いかけている作品といえよう。

彼が新たに詩人とは何かということを考えるにあたり、一つの重要な要素として検討に加えられたのは、先にも述べた詩人と社会の概念であった。つまり詩人の社会に対する行為とは何か、詩人とは社会に対しいかなる善を為すのか、ということであった。この様な考えは、少くとも初期のキーツには欠落していたようである。キーツが *Sleep and Poetry* において、また手紙において予見していたことは、詩人の内的発展のビジョンであり、彼の情念は彼の内的世界へと向けられていた。その内的世界の成長と成熟は彼に新たな視点からの詩人像を啓示したのである。それは内的世界に沈潜する詩人像ではなく、社会と行為で結ばれている詩人像であった。今やキーツは社会の中に詩人の位置と役割を追求しているのである。

『没落』の執筆中、キーツは社会の中での文学や詩人の位置というものを手紙の中で次のように指摘している。

... I am convinced more and more every day that (excepting the human friend Philosopher) a fine writer is the most genuine Being in the World—Shakespeare and the paradise Lost every day become greater wonders to me¹⁰⁾

... I am convinced more and more day by day that fine writing is next to fine doing the top thing in the world; the Paradise Lost becomes a greater wonder.¹¹⁾

これら二つの手紙の間には、10日間の時間の差があるが、まるで同じ日に書かれたかのように、共通の興奮と共通の確信が、ほぼ同じ文体で書かれているという事実、いかにキーツがシェイクスピアやミルトンの文学的行為の成果に興奮し、文学と詩人の存在意義に強い確信を抱いたか、我々は十分に理解できるのである。しかしこの二つの手紙に共通する一つの譲歩は注目に値するであろう。つまりキーツは社会において詩や詩人を最高のものと見なしはしない。彼は最高のものを“Philosopher”とし“the human friend”と讃え、文学作品は“fine doing”の下へ位置付けるのである。彼には詩や詩人を人生や社会における最上のものとする倨傲はない。彼にとって現実というものはもはや初期の詩で扱われたような逃避すべき労苦の世界ではなく、詩人として積極的に行為する対象となったのであった。ここにおいてキーツは *Sleep and Poetry* や手紙の中で彼が無意識のうちに志向していた現実の意味を認識するに到ったと言えるのである。

IV

『没落』という作品は1818年秋から翌年の3月中旬まで書き進められ、結局未完のまま放棄された叙事詩 *Hyperion* の改作版である。『没落』が前作 *Hyperion* と違うところは、この新しい詩のために300行あまりの序詩ともいえる導入部が書き加えられたことであろう。『没落』も *Hyperion* と同様、未完のまま放棄されたのだが、しかしキーツが新たに書き加えた部分の意味することは実に重大であり、『没落』の持つ意味の大半はこの導入部にあるといっても決して過言ではなからう。

我々はこの導入部を読むとき、真の詩人像を求め歩んで来たキーツの様々の軌跡をそこに見る思いがする。その意味においてこの部分はまさに詩人キーツの人生の縮図であり、ロマン派詩人キーツの持つ情念と理念の様々な流れがこの『没落』の冒頭300行あまりの中に合流しているのである。そこには「フローラとパン」の官能美の世界、および「処女思想の部屋」を想起させる楽園が描かれているし、その次には「第三室へと続く廊下」を象徴する「サターンの神殿の廃墟」も登場する。「楽園」から「廃墟」へと展開してゆく過程は、「眠りに落ち再び眼覚める」というキーツの常套手段が用いられている。

楽園から廃墟へと進んだ詩人を待っているのは女神モ

ネタであり、祭壇の階段において詩人が経験する死と再生は、*Hypprion* が放棄される直前に描かれている *Apollo* が神となる描写と同一のものである。そこに共通する思想は、新たな生のために死ぬということであり、その意味するところは、旧来からの自己から脱却することであり、*Apollo* においては神性を得ることを意味し、この詩人においては真の詩人へと変容することであった。では『没落』において求められている新しい詩人像とは一体どのようなものなのであろうか。女神モネタはその詩人像を祭壇に登り得る人間の性質に託し次の様に指摘するのである。

‘None can usurp this height,’ . . .
 ‘But those to whom the miseries of the world
 ‘Are misery, and will not let them rest’¹²⁾

ここで述べられていることは、先に引用した1819年3月19日付のキーツの手紙の中で述べられている「無私の精神」そのものであることに我々は気付くのである。1819年3月19日といえば、キーツが *Hyperion* を断念したまさにその時期であることを思えば、*Hyperion* の放棄と『没落』の執筆の動機は、キーツの「無私の精神」の発見にその一端が存在するように思えるのである。

さて『没落』はその後真の詩人と夢想家をめぐるモネタと詩人との応答がなされ、その後は再び先に放棄した *Hyperion* が語句の修正をほどこされながら語られ、*Hypprion* と同様『没落』も未完のまま放棄されたのであった。

我々はキーツが詩人としての人生を歩み始めて以来、彼が辿った詩人としての意識の成長の様を考察して来た。そこにおいて言えることはキーツが一つの理念として予見していた道程を彼は忠実に実現していったということである。その間キーツの意識は常に現実へと向けられ、彼の文学的行為と現実の間に致命的な乖離と失意を生じさせはしなかったという点は、彼の特質の一つとして挙げることができよう。キーツの詩人としての成長は、彼の詩人としての人生の最終局面を迎える1819年秋に至るまで着実に維持されている。そして驚くべきことには、

その時点においてキーツはロマン派詩人という枠を越え、より普遍的な立場の詩人へと脱皮する徴候すら見せていたのであった。しかしキーツにはその新しい立場から詩を書く時間は与えられてはいなかった。彼の詩人としての成長の縮図ともいえる『没落』が未完に終わったように、病いのため彼の詩人としての仕事をも断念せざるを得なかったのである。詩人としての名声を得るべく試みた長編詩への夢も果せず死を待つキーツの心境を、恋人ファニー・ブローンに宛てた手紙の一節から引用してこの小論を閉じよう。

“If I should die,” said I to myself, “I have left no immortal work behind me——nothing to make my friends proud of my memory——but I have lov’d the principle of beauty in all things, and if I had time I would have made myself remember’d.”¹³⁾

注

Text : M. Allott (ed) *The Poem of John Keats* (1970)
 H. Rollins (ed) *The Letters of John Keats*,
 2vols. (1959), 以下 *Letters* と略す。

- 1) 正式には *Intimation of Immortality from Recollection of Early Childhood*
- 2) *Ode to Nightingale*, ll. 73—4.
- 3) *Sleep and Poetry*, ll. 122—25.
- 4) *Ibid*, ll. 122—5.
- 5) *Letters*, I, 280—281.
- 6) *Solitude, if I must with thee dwell*, ll. 1—8.
- 7) *To one who has been long in city pent*, ll. 1—8.
- 8) *To J. H. Reynolds, ESQ.* ll. 89—105.
- 9) *Letters*, II, 79
- 10) *Letters*, II, 139.
- 11) *Letters*, II, 146.
- 12) *The Fall of Hyperion*, I, 148—151.
- 13) *Letters*, II, 263.

(受理 昭和58年1月16日)